

絵画の価値 His Pictures

藤田雅史

家賃6万8千円のアパートの部屋は、シングルベッドと最低限の生活動線のスペースだけを残し、ダンボールの箱でいっぱいになった。

1DKの狭い部屋とはいえ、大学時代から七年間も住んでいたから引越となるとそれなりに物が多く厄介で、昼過ぎから半日かけて箱詰めをしていたら、日が暮れる頃には腕の筋肉が小刻みに震えるほど疲弊してしまった。

日が落ちてからだいぶ経っていることに気づき、蛍光灯のスイッチを押すと、青白い光に照らされた部屋は、ずいぶんとうら寂しく感じられる。

ベッドが置いてあるのとは反対側、今朝まで組立式のスチールラックがあった東向きの壁には、今、ひときわ大きなダンボール箱が、組み立てた状態で口を開けて置かれている。

油彩キャンバスは折り畳むことができないから、そのままの大ききでダンボールにしまうしかない。八号や十号ならともなく、最大で二十号のサイズもあるので、それを梱包する箱にもそれなりの大ききが必要なのだ。そのために今日の午前中はホームセンターまで出向いて、掃除グッズと一緒にキャンバスを収められそうな大ききものをわざわざ買ってきた。

新しい部屋は路線を優先し、ここよりも相場の高い場所を選んだ。部屋の面積はわずかだが狭くなる。百枚近くにおよぶ、サイズの異なる油彩画は、本音をいえば邪魔でしかない。

勢いまかせに半日でほぼすべての荷造りを終えたというのに、絵の梱包だけまだ手をつけられていないのは、ぼくの気持ちにそ

れだけ迷いがあるからだ。

引越業者のトラックは、明日の午前中にやってくる。絵はまとめて梱包しトラックに預けるつもりでいるが、どうせ新しい部屋に運んでも、保存状態は今より悪くなるだけ。いっそのこと持つて行かないというのも、ひとつの手段ではある。

ぼくには絵描きの叔父がいた。

絵描きといっても、著名な画家ではない。母の弟で、五〇を過ぎても独身を通し、定職に就かず、絵を描いたり本を読んだり近所を散歩して毎日を通すような人だった。

母の実家である祖父母の家の庭先に、母屋と継ぎ接ぎしたように増築された六畳ほどの洋室が張り出していて、そこが叔父のアトリエだった。

本棚に分厚い美術全集が並び、壁には大量のキャンバスが立てかけられ、絵の具で汚れたイーゼルが何脚もあった。歴史の教科書に出てくる古代のギリシヤ人みたいな石膏の胸像が、不思議な存在感を放っていた。油絵の匂いと加湿器の白い湯気。南向きの部屋だったのか、日中は光がよく差し込み、窓際ではいつも細かな埃が舞っていた。そんなことをぼくはよく覚えている。

叔父と同居していた叔父の両親（ぼくの祖父母で、近所に貸アパートを三棟所有する資産家だった）が相次いで亡くなってからは、叔父がその自宅を相続し、ずっとひとりで住んでいた。

叔父の絵はさっぱり売れなかった。他に仕事をしていないから労働収入はなく、相続で母と分け合った貸アパートのうちのひとつの家賃収入が、唯一の食い扶持だった。

そんな叔父のことを、ぼくの母を含め、親戚の人たちはみんな馬鹿にしていた。ごくつぶしとか、落伍者とか、出来損ないとか、そんな単語をぼくが覚えたのは、みんな叔父について話す親戚連中の口からだった。

でも、ぼくは叔父のことが好きだった。物静かでやさしかった

し、なにより、ぼくは叔父の描く絵が好きだった。

叔父の絵はほとんどが人物画だった。抽象とも写実とも言い表せないその油彩画は、ゴーギャンのように大胆な筆づかいで、モディリアーニのようにちよつと不思議なかたちの人間を描いていた。どの作品も全体的に色は少し暗めで、ムンクっぽくもあつた。焦茶色や煉瓦色といった地味で深い色が背景にあつた。

そんな絵のどこが好きだったか、ぼくは自分でもよくわからな  
い。でも、なぜだか小さいときからぼくは叔父の絵を気に入って  
いた。祖父母の家に遊びに行くたびに、叔父の新しい絵を見せて  
もらうのが楽しみだった。

「そうか、良太はこの絵が気に入ったか」

「うん」

「じゃあいつか金持ちになったら買い上げてくれよ」

「いくらすんの？」

「いくらだろうなあ。いくらでも、別にいいんだけどな」

「じゃあ千円でもいい？」

「それはさすがに勘弁してくれ」

「ピカソの絵っていくらくらいするの？ 十万円くらいする？」

「十万円でピカソが買えるなら、俺は自分の財産をみんな換金  
して買い漁るね。ピカソの絵なんて値段をつけたら天文学的な数  
字になるぞ」

「てんもんがくてき？」

「めっちゃくちゃ高い、つてこと」

「百万円とか？」

「もつとだな。何億、何十億、何百億っていうレベルだ」

「すげえ。叔父さんの絵もそうなる？」

かはは、と笑う叔父の表情は、子どものぼくから見ても無邪気  
だった。それは他の大人たちの前ではけつして見せない笑顔だっ  
た。

「絵っていうのは、お金で価値をはかるものじゃないんだよ。」

まあ、そう考えてるやつもいるけれど、ほとんどの絵描きは金を稼ぐために描くわけじゃない。なんていうかな、俺にとつては、そうだな、祈り、みたいなものかな」

「いのり？」

「はは、難しい話だな。いや、いいんだ。なんでもない」

その叔父は二年前に自宅で倒れ、そのまま帰らぬ人となった。

叔父の遺体を発見したのは、貸アパートを管理する不動産屋で、相談事があった叔父に電話をかけたが何日もつながらず、不審に思って自宅を訪ねたところ床に突っ伏している叔父を見つけた。心筋梗塞だったようだ。

ちよつとした資産家とはいえ、叔父の兄妹はぼくの母親ひとりだったし、叔父はこれまで一度も結婚をせず子どももいなかったから、遺産相続で揉めるようなことはなかった。

問題は、アトリエに残された大量の絵だった。

価値がなければそれはただのゴミ。でも、叔父の絵に価値があるかないかは誰にも判別できなかった。ぼくの親戚連中は、母も含め、モネとマネの違いどころか、油彩画と日本画の違いもろくに説明できないような人たちばかりだった。絵は清掃センターに持ち込んで廃棄処分することに決まりそうだったので、仕方なくぼくが全部引き受けることにした。

「あんた、こんな絵どうすんの？」

「うーん、まあ、なんとかするよ」

レンタカーを借りてきて百枚近いキャンバスをアトリエから運び出し、ぼくはそれを自分の部屋の押し入れにつっこんだ。収納しきれない分はキッチンの食器戸棚や玄関の靴棚に積み上げた。

その当時のぼくは、はつきりいって人生のどん底だった。

就職活動でなんとかすべりこんだ会社が入社三年目で倒産した。加工食品を製造する小さな工場だったが、商品から食中毒の被害が出て、ついでに原材料の産地偽装までばれてあっけなくつ

ぶれた。社長は夜逃げし、最後の一ヶ月分の給料は支払われないままだった。ちよつとした事件に巻き込まれた感じだった。

ときを同じくして、大学時代から付き合っていた恋人にふられた。いつかそのうち結婚するだろう、と思っていた人だった。

別れ際、ぼくは彼女に言われた。あなたには夢がないからつまらない、と。理想の職業のアンケートで第一位に公務員が選ばれるようなこの時代に、そんなことを言う女がいるとは。それがまさか自分の彼女だとは。しかも会社がつぶれて無職になったタイミングで言い出すとは。どちらかというところ、仕事を失ったことよりこちらの方がショックが大きかった。

「なんだよ夢って」

「なんでもいいの。自分のやりたいこと、持ってた欲しかったの。それに向かつて頑張るひとでいて欲しかったの」

「いまさらそんな」

「ごめんね」

やり直そう、と何度も説得したけれど、彼女は頷いてくれなかった。あとになって知ったことだが、彼女にはそのとき新しい男がいた。年下のウェブデザイナーだそう。そうか、クリエイター系の男ならきつと大きな夢のひとつも持っているんだろう。

ぼくは、叔父の大量の絵を部屋に持ち込んだ日の夜、ひとりで缶ビールを空けてそれをぼんやり眺め、思った。

そうだ、叔父の作品を世界に広めよう。それをぼくの夢にしよう。無職の今ならぼくは自由だ。きつとなんでもできる。

夢を叶えて、見返してやりたいと思った。思いつきり強烈な力ウンターパンチを浴びせてやろうと思った。これまで叔父のことを馬鹿にしてきた人たちに、ぼくを捨てた彼女に、そしてついでにそのいけすかないウェブデザイナーの男に。

次の日から、ぼくは画商をはじめることにした。

正確には、画商の真似ごとだが、ぼくは真剣だった。やりたいことがどんどん頭のなかに浮かんだ。展覧会をしよう。作品集を

出版しよう。日本全国をまわって巡回展をして、それから世界に出よう。そこまでたどり着けば、ピカソとまではいかなくとも、一枚の絵がとんでもない高値で売れるかもしれない。

もちろん、それが夢物語であることはわかっていた。でも可能性はある気がした。もしかしたら叔父の絵にはすごい価値があるかもしれないし、それは実際に世に問うてみないとわからないことだった。我が家の親戚が認めなくても、世界が認めてくれるかもしれないなかった。期待で胸はふくらんだ。

とりあえずぼくは自分の部屋を事務所にして、名刺をつくり、営業をはじめることにした。資金が必要だったので、定期預金を全額解約した。パソコンでかんたんカタログをつくり、ホームページも立ち上げた。

でも、すぐにつまづいた。

貸しギャラリーを使って展示会を開いても、客はまったく来なかった。美術雑誌や画廊にカタログを送りつけたが、電話は鳴らなかつた。ホームページのアクセスは一日に数件しかなかった。

ぼくはアートの世界のことなんか、何もわかっていなかった。叔父と同じようなレベルの絵は世の中にごまんとあって、日本全国、いや世界各地で、毎日毎日、新しい絵が生み出され続けている。そのなかで注目を浴び、時代に見い出されるためには、なにかしらの理由が必要だった。そしてその理由がないから、叔父の絵は生涯売れなかつたのだ。

それでも、ぼくなりにはできることはすべてやった。ネットで画廊を検索して片っ端から売り込みに行った。ポストカードを作って、出店無料のネットショップで販売した。ジャンルを問わずにいろんな雑誌やメディアにカタログを送付し、メールを送り、電話をかけた。展覧会の企画書をイベントに持ち込んだ。

ほとんどの話を聞いてもらうことさえできなかった。でも、

「うん、なかなか興味深い絵だね」

そう言ってくれる人もときどきいた。

「きみさ、このタッチで肖像画とか描いたら案外お客さんつくかもしれないよ」

「いや、ぼくは描けないんです」

「え、きみの絵じゃないの？」

そんなこともあった。

なかには親身に相談にのってくれる人もいて、叔父の絵の雰囲気が好きそうなお客さんを紹介してくれたこともあった。

でも、やっぱり売れなかった。最後は、近所の公園のフリーマーケットに出品し、一枚五〇〇円でビニールシートの上に並べてみた。それでも売れなかった。

引越当日の朝の目覚めは、すつきりとしないものだった。

空はよく晴れていたけれど、叔父の絵をどうするか、一晩考えでも答えが出なかったせいで、鮮やかなはずの青空の色さえ濁って見えた。

先月、ハローワークで新しい仕事を見つけた。

再来週から、ぼくは輸入建材を扱う小さな会社の正社員として働くことが決まっている。職場が今の部屋からでは遠く、乗り換えが大変なので、それで引越をすることにしたのだ。結局、夢はあきらめた。

朝食の用意をしようとキッチンに立って、昨日、皿も調理器具もみんな梱包してしまったことに気づいた。コーヒーマーカーもダンボールの中だ。当たり前だが冷蔵庫も空だった。

はは。こんなに間抜けな男が、夢を持って努力したところで成功なんてするわけじゃないじゃないか。ぼくは寝間着にしている長袖のTシャツの上にパーカーを羽織り、財布とスマホだけ持って部屋の外に出た。

落伍者、出来損ない。そんな言葉が、見納めとなる近所の朝の風景に浮かんだ。ぼくが叔父のことを気に入っていたのは、同じ血が流れているせいだと納得した。同類相哀れむ。

ぼくは、これから勤める新しい会社で定年まで働くことができれば、もうそれでいい。食うに困らない生活ができて、いつか結婚とかして、子どもを育てて、年金をもらって、平均寿命のあたりで一生涯を終えれば上出来だ。

夢を失ったことで傷ついたりはしなかった。理解しただけだ。人にはそれぞれにふさわしい器があり、それは現実の社会が、努力の結果として正確に提示してくれるということを。ただ、叔父の絵の始末について思うと胸が痛んだ。

叔父さん、ごめん。ぼくにはできなかった。

そもそも絵の世界のことなんて何も知らないズブの素人なんだ。当たり前だよ。絵のことを一生懸命勉強して、美大を出ている人でさえ、ほんのひと握りしか食っていけない世界なんだ。うまくいくわけないんだよ。それに、途中でわかったよ。叔父さんは有名になったり、お金や名誉が欲しくて絵を描いてたわけじゃない。ぼくがやってたことは、きつと叔父さんの望むことじゃなかった。最初から気づいていればよかった。ごめん。

コンビニでパンとコーヒーを買い、ダンボールの箱で埋め尽くされた部屋に戻った。

窓辺には、かつての叔父のアトリエのように、日差しを浴びた無数のほこりがきらきらと舞っていて、ぼくはベッドに腰を下ろし、パンをかじりながらそれをじつと見つめ、考えた。

油絵のキャンバスは布と木でできているから可燃ゴミでいいのだろうか。普通に燃やしても平気な絵具なのだろうか。自治体の指定袋にそのまま入れて出せばいいのか。それともやはり木枠を解体した方がよいのだろうか。面倒なら、いつそ親戚連中の言うていたように、清掃センターにまるごと持ち込めば早いかと。

スマホにメールの着信があったのは、コンビニのビニール袋に、食べ終えた空の袋を押し込んで立ち上がったときだった。

見ると知らないアドレスからだった。迷惑メールかと思った



が、件名が「良太へ」となっていたので慌ててタップして開いた。そのときぼくは、それが別れた恋人からのメールではないかと思っただ。彼女がいけすかないウェブデザイナーと別れ、ぼくとよりを戻したくなっただのではないか、アドレスが違うのは携帯キャリアを変えたとかそういう事情があつたことで、なにともあれ、彼女は今もぼくのことを恋しく思っているのではないかと。

違った。ばかにもほどがある。でも、そのメールの中身は、別れた恋人からのメール以上に衝撃的なものだった。

「良太へ。迷惑かけて悪かったな。俺の絵を引き受けてくれてありがとう。お前はよくやってくれたよ。絵はまあ好きに処分してくれ。と言いたいところだけど、もし気に入ってくれる人がひとりでもいるなら、その人に、タダでもいいからやってくれ。」

俺は結婚もしないで、子どももいなかったけれど、それが、俺にとつては絵だったんだよ。俺の絵は俺の人生そのものなんだ。俺が生み出して、育てた、大切な絵なんだ。だからそれを捨てられてしまうのは、本音を言えば、少し悲しい。

お前には感謝をしてもきれない。でも、もうじゅうぶんだ。俺に絵があつたように、良太、お前にはお前の人生がある。自分の人生を生きろ。な。〜

メールはそこで終わっていた。

誰かのいたずらかと思つたが、ぼくと叔父の關係を知っている人のなかに、こんなメールを送りつけてくるような人間はいない。それに、これは確かに叔父の言葉だった。

ぼくはしばらくスマホを手に部屋の真ん中に突っ立つたまま、この奇妙な出来事を説明する理屈を考えた。でも、いくら考えても合理的な答えは出てこなかった。やはり叔父が天国からメールを送ってきたとしか考えられない。

ぼくは押し入れに取り残された叔父の絵の中から、いちばん気に入っているものを一枚抜き出して、積み重なったダンボールをどかし、部屋の壁際にスペースをつくってそこに立てかけた。

男の絵。年配の、細長い顔の男の絵。目や鼻や口の輪郭が曖昧で、表情がまったく読み取れない。年齢も職業も何もわからない。わかるのは、肌の色が薄いことと、黒い丸首の服を着ていることだけだ。背景は濃い臙脂色で、それが肌の白さを際立たせている。

なんでかわかんないけどこの絵、好きなんだよな、と思った。なんで好きなんだろう、と考えた。

ずっと見つめていると、その絵の人物は、全く似ていないが叔父の肖像画のようにも、鏡に映ったぼく自身のようにも思えてきた。やつぱり捨てたくないな、と感じた。そして思った。

いつかこの絵が似合うような家に住めばいいんじゃないか。

そうだ、一生懸命働いて、お金を貯めて、郊外の土地の安いところでいいから、この絵が似合うような、少しくすんだ白い壁の家を建てよう。一軒家が無理なら、ちよつと広いマンションに住もう。いいソファを置いて、美味しいお酒でも飲みながら、一日の終わりにそこに腰掛けてこの絵を眺めよう。

そして、一緒にこの絵を気に入ってくれる、見てくれる、そんなやさしい人を見つけよう。

それをぼくの新しい夢にしよう。

叔父に返信して伝えようと思った。きつと、ありがとう、と微笑んでくれるに違いなかった。ぼくはスマホを起動した。ところが、さつき叔父から届いたメールが、どこにもない。最後の着信は、引越業者が寄越した予約の最終確認のメールだった。

あのメールはいつたい、なんだったんだ。

ぼくは絵の男に問いかけた。男は何かを答えたそうな表情に見えた。でも、何も言わないよ、という表情にも見えた。いくら目を合わせようとしても、男はぼくと目を合わせてくれなかった。

ぼくはじつと、じつと、じつと、その絵を見つめた。



※この作品はフィクションであり、実在の人物、団体等とはいっさい関係ありません。  
※本作品に関するすべての権利は著者本人に帰属します。また、無断での複製・改変・放送・上演等は固くお断りいたします。